

〔第32回学術集会 オンデマンド講義〕

いのちの営みをとらえる「人と家族のヘルスエスノグラフィ」

福井県立大学看護福祉学部 教授

道信 良子

人間は長い歴史のなかで、他人の助けを得なければ自身のいのちを保つことができない状態や、困難を有する人に手を差し伸べるといった経験を重ねて生きている。家族という制度もこのような人間の経験に基づいて成立している。一方、医療の分野においては、病む人は近い人やなじみの場所から引き離され、特別な場所で治療され、快復すれば元の場所に戻されており、研究においても、現象を生み出す「個」を単位として分類し、予め定められた条件によって「個」をまとめなおしたりする。

しかし、家族という制度や感情や運命によって深く結びついている共同体から、どのようにして「個」を取り出し、人のいのちを見つめることができるのだろうか。この問いへの答えは、家族をひとつのシステムととらえ、家族一人ひとりがどのような相互作用を起こしているのか、家庭内でどのような動きがあるのかという見方をする「家族看護」にあるのかもしれない。演者が開発をしているヘルスエスノグラフィの調査においても、むしろ「まとまり」や「つながり」を単位にいのちの営みをとらえる方が、より自然な理解ができる場面に遭遇する。

演者は、小児病棟に長期にわたって入院している小児がんの子どもたちとその家族に長くかかわり、観察研究やインタビューを行ってきた。子どもたちの親はわが子の病気の告知を受けた後、自らを顧み、自分自身の行いを悔やみながら子どもが病気に罹った理由を探し続ける。「子どもを心配させない」という決意は、わが子に告知をしない決定的な理由だった。一方、子どもたちも、そのように考える親

の苦悩を生きていた。仕事と介護によって疲れ果てて病室でねむる親の身体にくるまれて、子ども目を閉じた。親は、子の身体や体調の変化に一喜一憂し、5年の経過を指折り数えた。退院して2年が過ぎようとしたときに再発したわが子を思わず叱った親に、子は道化師のようにふるまい、その翌日、病室を訪れた看護師の前で泣いた。

親が子の苦しみを生き、子ども親の苦しみを生きているという状況において、親が抱える問題を親の問題とし、子が抱える問題を子の問題とするような研究の視点や、親と子を個別の存在とみなして子の意思を問うような意思決定の方法では、子どもの幸せや真のウェルビーイングに到達することはできないのではないだろうか。いずれも、人は、家族は、どういうものかということまで考慮しなければならない現象であり、そこに家族看護のいとなみがあるように思う。

この講演では、2015年から現在まで少しずつ集めてきたヘルスエスノグラフィの資料をもとに、小児がんという慢性の病いを親と子はいかにして生きているのかを論じ、家族看護の実践に結びつけ、「人と家族のエスノグラフィ」への道筋をつけていく。

略歴

日本学術振興会特別研究員、札幌医科大学保健医療学部一般教育科講師、同大学医療人育成センター教養教育研究部門准教授を経て、現在、福井県立大学看護福祉学部社会福祉学科教授。専門は医療人類学。